A4-5

頭部外傷後遷延性意識障害患者に対する鍼治療による運動誘発電位の増加効果

○米澤 慎悟、松本 淳、野村 悠一、池亀 由香、西山 紀郎
兼松 由香里、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院　中部療護センター

【背景と目的】

脳損傷患者や遷延性意識障害患者において、皮質脊髄路の興奮性の指標となる経頭蓋磁気刺激(TMS)による運動誘発電位(MEP)の振幅減少や閾値上昇、潜時遅延などの波形変化がみられることが報告されている。以前に我々は、頭部外傷後遷延性意識障害患者に対する鍼治療の効果について MEP を用いて初歩的な検討を行い報告した。今回は、症例数と評価項目を増やして検討を加えた。

【セッティング・対象】

当センターに入院中の交通事故による頭部外傷後遷延性意識障害患者 14 例

【デザイン】

鍼治療時（鍼治療前後）と対照時（同じ患者の別日の無治療安静前後）の変化量の比較

【介入】

水溝、印堂、合谷、足三里への 10 分間の置鍼術

【評価】

運動野上肢領域に TMS を行い、対側の短母指外転筋から誘発した MEP の安静時閾値、振幅、Central motor conduction time (CMCT)を算出した。測定は、鍼治療前（安静仰臥位 10 分後）、鍼治療中（鍼治療 10 分後）、治療後（鍼の抜鍼後 10 分後）に行い、対照時には無治療安静のみで 10 分間隔で同様の測定を行った。主要評価は MEP 振幅の治療後の変化量とした。

【結果】

MEP 振幅値は鍼治療中・治療後に増加し、変化量の比較でも対照時に比べ、鍼治療後に有意に大きな値を示した（P=0.001）。閾値は、対照時に比べて鍼治療後に有意に大きく減少した(P=0.018)。CMCT は対照時に比べ、鍼治療後に減少傾向を認めた。

【考察および結語】

MEP 振幅の増加や潜時の減少、閾値の減少、CMCT の減少傾向から、鍼治療による皮質脊髄路の興奮性増加が示唆された。